



第2章 授業づくりの実際

小学部 授業づくりの実際

1 はじめに

(1) エンジョイタイムとは

令和元年度までの研究より、様々な経験を積み重ねて「知ること」や「学ぶこと」の楽しさを味わうことや、「楽しいからやってみたい」という思いをもつことが「生涯学習力」の素地につながることを示唆された。

小学部の児童の実態は、自分の興味・関心のあることには積極的に取り組むが、その範囲は狭く、好きなことにじっくり取り組む機会も決して多くはない。様々な経験を積み重ねることや、何かに没頭する時間を確保することで、生涯学習力の素地が育まれると考えた。

「生涯学習力」に掲げられている「主体的にヒト・モノ・コトに関わる力」

は、学習指導要領に示された育成を目指す資質・能力の三つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」と関連性が高い

(図1)。各教科等において育成が図られているが、既存の学習では、「ヒト・モノ・コト」への関わり方は、教師のねらいや意図によって限定されていることが多い。児童の特性を踏まえると、決められた関わり方ではなく、自分の得意な関わり方で「ヒト・モノ・コト」へ関わる経験を積み重ねることが、「生涯学習力」の素地につながると考えた。

以上のことから、令和3年度に「エンジョイタイム」を新設し、令和4年度より生活単元学習の中に位置付け、実施した。

(2) 本年度の研究

令和3年度の研究では、新設した「エンジョイタイム」の授業づくりを通して、「生涯学習力」を高めるために、授業で大切にしている要素を整理し、授業や児童の変容を評価する観点を検討した。

本年度は「エンジョイタイム」の授業実践の2年目であり、授業で大切にしている要素を小学部から高等部までの姿を見据えた視点で整理し、授業と児童の評価への活用の仕方を検討した。

2 「エンジョイタイム」の定義と「生涯学習力」を高めるための要素の整理

小学部の職員が、「エンジョイタイム」(注)の位置付けや主なねらいを共通理解し、授業づくりを進められるように、年度当初の学部研究会において「エンジョイタイム」の定義を明文化した。「エンジョイタイム」は、児童が自分の得意な関わり方で、様々なヒト・モノ・コトに関わる経験を保証する時間であり、教師は、児童の活動の様子から、児童の内面の動きを推察し、興味・関心の対象やその広がりを見取することを確認した。

昨年度に検討した『「生涯学習力」につながる、『エンジョイタイム』で大切にしていること』の要素について、小学部・中学部・高等部のつながりの視点で改めて整理し、小学部の「わかほとモデル」を設定した(p.3参照)。「生涯学習力」の素地を育む段階である、小学部では、児童の「夢中」と「好奇心」の要素の膨らみを大切に授業づくりを行うこととした。

(注)「エンジョイタイム」

安心できる環境において、自分の得意な関わり方で、ヒト・モノ・コトに関わる経験を積み重ね、「生涯学習力」の素地を育む時間。

興味・関心を広げたり、深めたりすること、自分の好きなモノやコトを知ることが、主なねらいである。

・各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況の評価するもの(目標準拠評価)
・したがって、目標準拠評価は、集団内での相対的な位置付けを評価するいわゆる相対評価とは異なる。

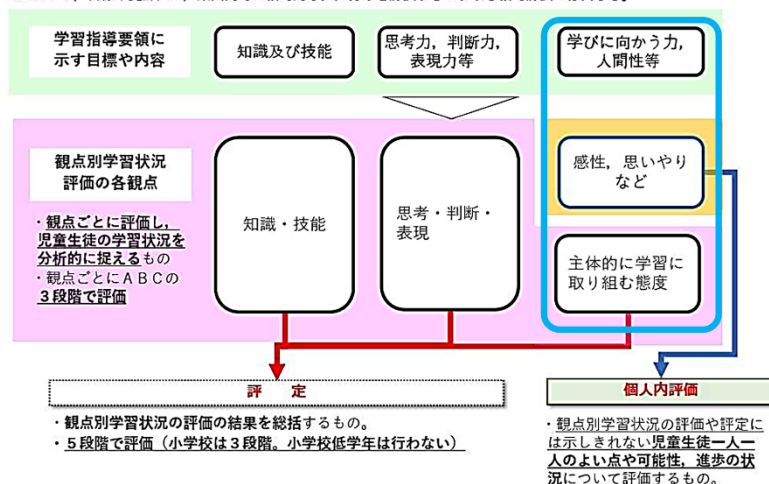
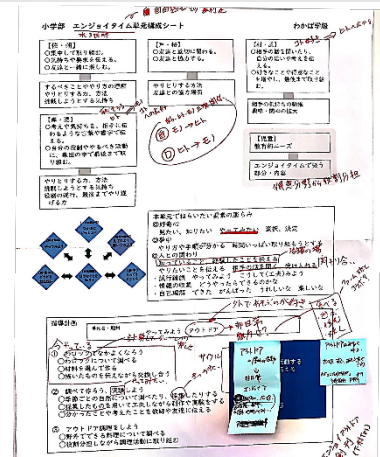


図1 各教科における評価の基本構造 (文部科学省、2020：一部加筆)

3 単元構想シートの活用

多角的な視点を単元構想に取り入れられるように、小学部・中学部・高等部の縦割りグループに分かれて、単元構想シートを持ち寄り、意見交換をする「つながりミーティング」を年間3回実施した。

「私の応援計画」と教師の願いを元に作成した児童一人一人の教育的ニーズから、「エンジョイタイム」で扱う内容を抽出し、単元において、特に膨らませたい「わかはとモデル」の要素と併せて検討し、指導計画を立案した（資料1）。一連の流れをシートにまとめて可視化することで、単元を通して、期待する児童の姿が具体的になり、学習活動を設定する根拠となった。また、他学部の実践の紹介などを受けて、授業づくりのアイデアや、児童を評価する際の見取り方が広がった。



「単元構想シート」を基に縦割りグループで話し合い

4 授業の実際

(1) あおば学級（5・6年生） みえない力でうごかそう（全校授業研究会：6月）

あおば学級の児童は、友達や教師との関わりを楽しむ児童や、自分の好きな物に繰り返し関わる児童、特定の活動に強い興味を示す児童など実態は様々である。じっくりとモノに関わり、経験することで、自分の好きなことを見付けたり、こうしたらどうなるのかと試したりする姿を期待して、授業づくりを行った。磁石や風、ゴムといった、身の回りにある素材の力を題材として取り上げ、1時間に1つの題材を扱い、それぞれの力を体験できるコーナーを複数設定した。

学部研究会では、授業の様子を小学部職員全員で視聴し、教材の工夫や児童の試行錯誤を促す仕掛けづくりの検討と、児童のヒト・モノ・コトへの関わり方を見取り、共有を行った。複数の教員で、授業の様子を振り返ることで、児童の夢中に寄り添う教師の関わり方や、言葉による経験の補完の仕方、活動の振り返り方について深めることができた。

授業研究会では、「好奇心」と「試す」の要素が膨らんでいる児童の姿を見取り、児童の姿を引き出した支援について、グループごとに検討した。

【好奇心：どきどき わくわく】

- ・教師と一緒に遊び、楽しそうな雰囲気づくりや言葉掛けをすることで、新しいゴムの種類や遊び方に気持ちが向いていた。
- ・自由度が高く、自分で選択できる活動設定だったため、児童が自分から気になるモノに手を伸ばしたり、繰り返しの倒したりする姿が見られた。
- ・倒れたことが分かりやすい的の工夫により、「的を倒したくて仕方がない」という気持ちを引き出していた。
- ・安心感のある環境によって、友達や教師の様子を見て、自分もやってみようという気持ちになっているのではないかと。

【試す：やってみよう（試してみよう）】

- ・簡単には倒れない的があり、的との距離を縮めて打ってみる姿が見られた。
- ・ゴムの種類が複数あることで、いろいろと試してみたい気持ちを高めているのではないかと。



友達と一緒に教師に「風」を当てて楽しむ児童



全体に対する説明の時間を短くし、児童が素材に向き合う時間を十分に保証することで、自分が好きな感触や動きを見付けたり、繰り返し素材に触り、違いに気付いたりすることができた。一方で、児童が人と学ぶことのよさを実感するためには、一人でモノに向き合う時間と、友達と一緒に活動する時間を単元の中で調整する必要が示唆された。

(2) わかば学級(3・4年生) チャレンジ!カイト (公開研究協議会公開授業: 11月)

わかば学級では、「アウトドア」を年間通じての「エンジョイタイム」のテーマとして学習を行った。繰り返し取り組むことでやり方が分かって、「もっとやってみたい」という姿や、学んだことを友達に伝えようとする姿などが見られるようになっていた。「チャレンジ!カイト」の単元では、好きな素材や形、色を選んでカイトを制作し、あげる活動を行った。やり方が分かかってじっくりと取り組む姿や、新たな作り方を試す姿、友達と目的を共有して、やり遂げる達成感を味わう姿を期待して授業づくりを行った。



【夢中: じっくり】

素材や形の異なるカイトの中から、自分の作りたいカイトを選択して制作し、実際にあげてみて、改善したいところがあれば作り直すという活動を繰り返した。カイトの作り方が分かり、じっくりと制作に取り組む姿が見られた。



【人との関わり: なかまといっしょに、好奇心: ドキドキ わくわく】

カイトをあげている様子を動画や写真で撮影し振り返ることで、自分と友達のカイトを見比べて、友達のカイトの良さに気付く児童が増えた。「自分のカイトもこうやって作ってみたい」と新しい作り方を試そうとする児童もいた。



【人との関わり: なかまといっしょに】

これまでのカイトと同じ方法で制作できる、連凧や大きなカイトの映像を提示し、クラス全員で作るカイトを選択できるようにした。前時まで積み重ねてきた「好奇心」や「夢中」を持続させたまま、全員でカイトを制作し、高くあげようとあげ方を工夫する姿が見られた。



10月に行った事前研究会では、小学部で特に膨らませたいと考えている「夢中・好奇心」が、中学部や高等部における力と、どのように結びついているのかをテーマに協議を行った。

自分が楽しいと感じることを夢中になって取り組むことが、集中や諦めない気持ちにつながることで、好奇心を育むことで、安心感をもって新しいことにも挑戦しようとする姿になるなど、小学部段階における「生涯学習力」の素地と、中学部・高等部とのつながりを確認することができた(図2)。

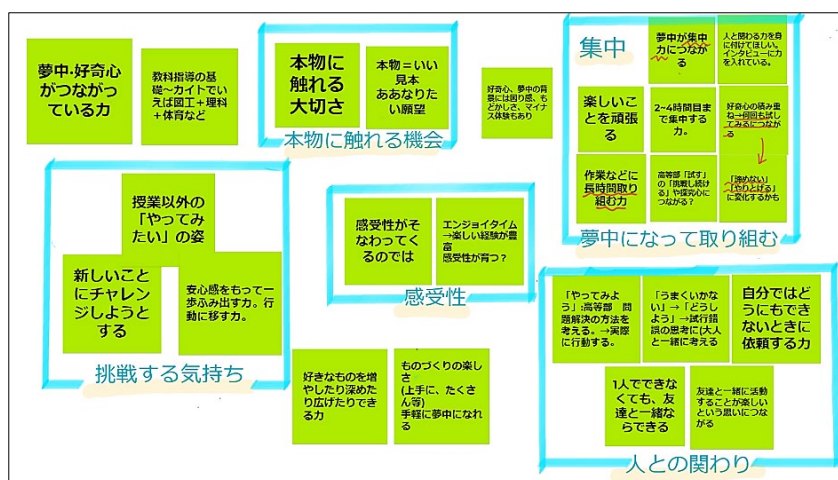


図2 小学部 事前授業研究会 協議 Jam bord

公開研究会では、「児童の『夢中・好奇心』を膨らませる仕掛けづくり」をテーマに、小学部の取り組みの紹介と協議を行った。児童が夢中になってじっくりと考える時間の確保や、大きな「わかばイカイト」があがっている様子を見る機会を設定することで、より好奇心が高まり、夢中になって取り組むのではないかという意見が挙げられた。

5 授業の評価と児童の変容の見取り

毎時間の授業後に、児童一人一人の様子を簡単な記述で記録した。児童の様子から、扱う教材の量を調整したり、活動時間を増減させたりするなど、評価と授業の改善を繰り返した。「わかばとモデル」のどの要素を高めたいのかという視点に立つことで、適切な題材を設定し、学習活動を精選することができた。児童一人一人の「わかばとモデル」の要素については、一時間の授業で大きな変化をねらうのではなく、一つの単元を通じて、その膨らみを見取することを共通理解し、単元の前後の姿で比較・評価した（資料2）。児童の様子を担当間で話し合い、特に膨らんだ要素について検討し、児童の内面の動きについても推察した。全員の要素の変化を一覧に表すことで、その単元でねらっていた要素を膨らませるのに妥当であったかを検証する、一つの視点となり、授業の評価・改善へつなげることができた。

学級ごとに対象児童を1名抽出し、単元の初期の実態や学習中の学校や家庭での様子、「わかばとモデル」の膨らみの変容をまとめた（資料3）。児童のヒト・モノ・コトへの関わり方を見取る中で、自分の好きなモノを介して、ヒトへの関心が高まっている児童や、安心できるヒトと一緒に活動することで、その活動への興味・関心が広がっていく児童など、児童によって関わり方に特徴がみられた。児童の得意なヒト・モノ・コトへの関わり方を教師が見取り、共通理解することで、児童の興味・関心を広げたり、新しい環境での学びを支えたりする一助になると考える。

児童の「わかばとモデル」の膨らみを捉える視点での評価は、教師が児童に寄り添い、児童の興味・関心を理解しようという姿勢での見取りにつながった。

6 まとめと今後に向けて

（1）授業づくりと評価における「わかばとモデル」の活用

単元の構想時に「わかばとモデル」のどの要素を膨らませたいのかという視点を挟むことで、期待する児童の姿が明確になり、適切な仕掛けを掘り下げて考えることができた。小学部・中学部・高専部が同じ視点をもって授業づくりを行うことで、それぞれの児童生徒の姿のつながりも顕在してきている。

評価においては、児童の姿の変容を「わかばとモデル」の要素の膨らみで捉えることで、児童に寄り添った視点で、過去から将来の流れの中での姿を想定する深い見取りが可能になった。「わかばとモデル」により、目の前の児童の姿と「生涯学習力」のつながりを改めて認識することができた。

（2）今後に向けて

「生涯学習力」を高める授業づくりの実践を重ねることで、教師の題材設定の幅が広がり、様々な題材を通して経験を積み、余暇につながる単元や題材を検討できるようになった。また、新しいことをやってみようとする児童が増え、「エンジョイタイム」を楽しみにする姿も見られるようになった。

今後は、「エンジョイタイム」で見られた、「生涯学習力の素地が芽生えた」児童の姿を、「わかばとモデル」に当てはめて整理し、「エンジョイタイム」以外の場面でも活用できる「生涯学習力」を高める視点の、より具体的な構築が必要だと考える。

児童によって、ヒト・モノ・コトへの関わり方が異なるように、児童一人一人の目指す「生涯学習力」も多様である。「私の応援計画」と「生涯学習力」の関連を整えることで、より深く、児童一人一人の「生涯学習力」に迫ることができると考える。

小学部 エンジョイタイム単元構想シート わかば学級

【A】

- 集中して取り組む。
- 気持ちや要求を伝える。
- 友達と一緒に楽しむ。

すべきことややり方の理解
やりとりする力、方法
挑戦しようとする気持ち

【D】

- 考えや気持ちを、相手に伝えるような言葉や書字で伝える。
- 自分の役割ややるべき活動に、集団の中で最後まで取り組む。

やりとりする力、方法
挑戦しようとする気持ち
役割の遂行、最後までやり遂げる力

【B】

- 友達と適切に関わる。
- 友達と協力する。

やりとりする方法
友達との協力場面

【C】

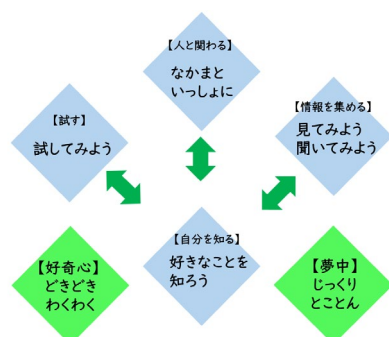
- 相手の話を聞いたり、自分の思いや考えを伝える。
- 好きなことや得意なことを増やし、最後まで取り組む。

相手の気持ちの類推
興味・関心の拡大

【児童】

教育的ニーズ

エンジョイタイムで扱う
部分・内容



本単元でねらいたい要素の膨らみ

- ◎好奇心
見たい、知りたい やってみたい 選択、決定
- ◎夢中
やり方や手順が分かる 時間いっぱい取り組もうとする
- ◎人との関わり
知っていること、経験したことを伝える
やりたいことを伝える 相手の話を聞く、受け入れる
- ・試す やってみよう こうして(工夫)みよう
- ・情報を集める どうやったらできるのかな
- ・自分を知る できた がんばった うれしいな 楽しいな

指導計画

単元名・題材

やってみよう アウトドア

- ① わロックでなかよくなるう
 - わロックについて調べる
 - 材料を選んで作る
 - 描いたものを伝えながら交換し合う
- ② 調べて作ろう、実験しよう
 - 季節ごとの自然について調べたり、採集したりする
 - 採集したものをういて工夫しながら制作や実験をする
 - 分かったことや考えたことを教師や友達に伝える
- ③ アウトドア調理をしよう
 - 野外でできる料理について調べる
 - 役割分担しながら調理活動に取り組む

調べる、考える

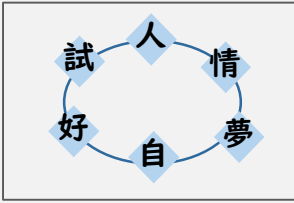
↓

選択・決定して活動する
思いや考えを伝える
受け入れる

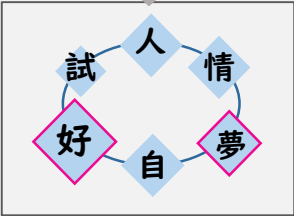
↓

やり遂げる
楽しむ
達成感、満足感

A



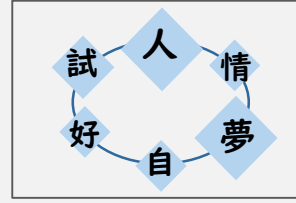
繰り返し走ったり、あがったカイトの系を持ち続けたりして、カイトが揚がる感覚を楽しんでいる



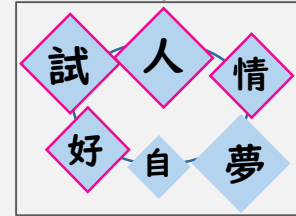
既製品の大きなカイトをあげることで、あがっている感覚をつかむ

●モノへの興味→体験する(コト)中で、ヒトやモノへの興味・関心が広がっている。

B



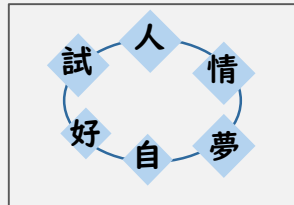
友達がカイトをあげる様子に注目し、自分も同じようにあげたいと話す



他の学習場面でも、友達の様子を見て、「こうしたい」と話すようになった

●ヒトと一緒にやりたい気持ちが強く、一緒に活動する(コト)中で、モノそのものへ興味・関心が向いていく。

C



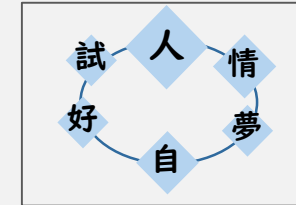
自分なりに高くあがるように、あげ方を考えている



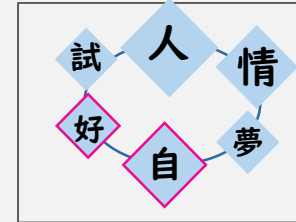
友達の様子を見て、友達の得意を知り、友達のあげ方に興味をもつ

●自分の興味・関心のあるコトを共有できるヒトへの関心が高く、一緒に活動(コト)する中で、モノへの興味・関心が深まる。

D



自分たちがカイトをあげている様子を見たいと自分から話す



「家でもやってみたい」と話し、冬休みにカイトをあげた

●安心できるヒトと一緒に活動を繰り返す(コト)中で、自分の好きなコトやモノを見付けて、少しずつ広げていく。

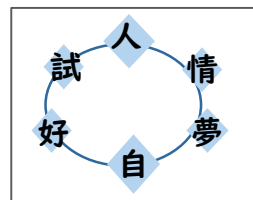
【わかはとモデル】

	小学部	中学部	高等部
人と関わる	なかまといっしょに	人とつながりをつくろう	人とのつながりを広げよう
情報を集める	見てみよう・聞いてみよう	見て聞いて調べよう	経験を生かそう
試す	やってみよう	試してみよう	挑戦し続けよう
自分を知る	好きなことを知ろう	いろいろな自分を知ろう	なりたいたい自分を知ろう

様々なことに興味・関心をもつことが大事であり、生涯学習力を高めるための基盤となる【夢中】【好奇心】

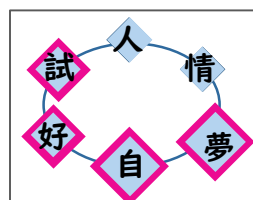
【凡例】

単元前




人との関わりを好み、自分の好きなことには繰り返し取り組む【実態】

単元後



新しいものにも手を伸ばして繰り返しやってみる姿が多く見られた

◆ …特に膨らみが見られた要素

○背景 児童の実態 ★目指す姿	
<p>○友達が好きで、関わりたい気持ち強い。気になることや気付いたことなどを積極的に発言する。</p> <p>○説明を聞いて何をするのかが分かり、自分から進んで材料を選んで作ろうとする。</p> <p>○初めての活動に対して、やってみたいという気持ちがあるが、やり方に自信がもてないときは、周囲の友達に助けを求めることが多い。</p> <p>★友達と関わりながら、新しいことに挑戦して楽しむ姿。(人・試)</p> <p>★自分のイメージに近づくように、友達の様子を見て気付いたことを伝えたり、材料や作り方を工夫したりして作る姿。(好・人・試)</p>	
学校・家庭での児童生徒の姿	
<ul style="list-style-type: none"> ・新しい題材のカイトの形やあげ方に注目して、高くあがるイメージの発言をする。 ・飛ばしてみたいカイトを選ぶ場面で、一番に手を挙げるが自力では選べず、友達を呼んで、先に選ぶように勧める。 ・うまくあげている友達の様子をよく見て、まねをしたり、友達が使っているたこをあげてみようとしたりする。 ・教師がカイトを高くあげている様子を見て、声を出して嬉しそうにしている。 ・自分があげているカイトを振り返って見ようとする。 	
教師の見取り	
<ul style="list-style-type: none"> ・「カイト＝高くあがる」というイメージがあり、そのイメージに近づけるようにいろいろなやり方であげている。 ・カイトそのものよりも、あげている人に注目していて、自分のイメージに近いあげ方をしている友達や教師のあげ方をまねしたり、カイトの種類を変えたりして高くあげようとしている。 ・周囲の様子から情報を取り入れて、すぐに実行できる。 	
その後の授業でのアプローチ	
<ul style="list-style-type: none"> ・友達の様子を見る機会の確保 ・自分と友達のカイトを見比べる機会の設定 ・より高く上げられる場所(前庭)での活動 ・高くあげるためのポイントの整理 	

夢…夢中 好…好奇心 人…人と関わる 情…情報を集める 試…試す 自…自分を知る

【授業中の児童の姿】

【Bの「わかとはモデル」の変容】

<単元前>

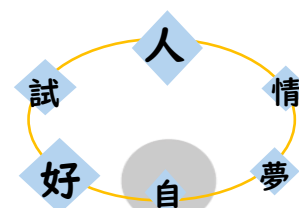


「Cくん!みてみて!」

Aと教師が高くあげているカイトを見て「Aくんすごいね!」と、大興奮。自分のカイトを持ち、Aと同じようにあげてみようとするも上手いかない。自分のカイトとAのカイトを見比べてみると、糸の張り方が違うことに気が付き「オーノー」と一言。

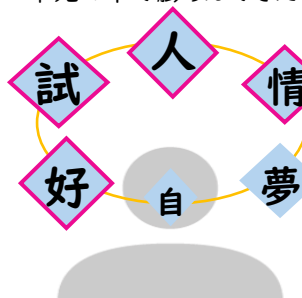
次のエンジョイタイムの時間で、この時間のことを覚えており、「自分のカイトの糸(の張り方)を直す」と話した。

「ヒト」への注目を通して、あげ方やカイトの素材への関心が芽生え、広がってきた。



- ・やってみたい気持ちはあるが、初めてのことは自信がない。
- ・人と関わりたい気持ち大きい。

<単元の中で膨らんできた要素>



- ・友達の様子から、情報を取り入れ、やってみようとする姿が増えた。
- ・カイトの細部に注目して、制作する姿が見られるようになった。

中学部 授業づくりの実際

1 はじめに

令和3年度は児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めるための基盤整備について、授業実践をしながら「生涯学習力」を高めるために必要な要素を検討した。作業学習を対象授業としたが、作業学習以外の場面でも「生涯学習力」を高めるための検証が必要と考えた。

そこで、令和4年度は、学校の教育活動全体を通して児童生徒の「生涯学習力」を高めるための要素を精査し、「わかはとモデル」を作成した。対象授業として生活単

元学習を取り上げ「わかはとモデル」を授業づくりのポイントとして活用していくこととした。この「わかはとモデル」は、小学部や高等部とのつながりを意識したり、授業づくりにおいてどの要素を膨らませたいのかなどを検討したりしながら授業実践に取り組むことができた。



中学部 生活単元学習

「わかはとモデル」を授業づくりとして活用

【人と関わる】【情報を集める】【試す】【自分を知る】



<中1> 中1ふしぎ発見～商店街を調べよう～

地域の通町商店街にインタビューをし、調べたことを発表したり、クイズでまとめたりする活動。

<中2> 中2ピザ7～〇〇と交流しよう～

ピザづくりを知ってもらうために、クイズやダンスを企画して交流したり、ピザと一緒に作ったりする活動。

<中3> 中3ファイブでバイキン0計画～あたらしいチャレンジパート〇～

修学旅行で体験した石けんづくりを中学部の他クラスに紹介したり、一緒に石けんを作ったりする活動。

図1 中学部 生活単元学習の主な授業内容

2 授業の実際

(1) 中2ピザ7～中1と交流会をしよう～（全校授業研究会：5月）

中2の生活単元学習では、中1の生徒と仲良くなるために交流会を企画する授業を行った。中2は年間を通して学校にあるピザ窯を使ってピザ作りに取り組み、ピザを作るための野菜を育てた。また「ピザ7」（生徒7人が決めたピザの学習の単元名）を知ってもらうために他学年と交流する学習を行った。本単元では、「生涯学習力」を高める要素である【人と関わる】【試す】に焦点を当てた授業を展開した。

【人と関わる】

中学部に入学してきて2ヶ月の中1の生徒たちに自分たちが学習してきた「ピザ7」のことを知ってもらいたい、喜んでほしいという生徒の思いから、交流会を計画した。交流会に向けて、ピザの学習について紹介するオリジナルの歌詞とダンスを作ったり、ピザの作り方やピザ窯についてのクイズを考えたりした。話合いで7人の意見がまとまらないときは、相手に伝える伝え方、相手が喜ぶ内容を基準に考え、試行錯誤しながら生徒が主体となり準備を進めることができた。

【試す】

「ピザ7」ダンスの歌詞とダンスを考える場面を設定した。歌詞を音数に合わせるには、どの言葉を入れることが適当なのかグループごとに話合いをした。「こっちのほうがよさそう」「この言葉にしみよう」とお互いに意見を出し合いながらメロディーを聴いて音数が合っているかどうか考えた。その後、グループで考えた歌詞を全員で共有し、最終的に歌詞を完成させることができた。



ペアで歌詞を考える

交流会本番では、自分の役割が分かり司会や進行を大きな声で説明する、中1にピザのキーホルダーの作り方を優しく教える、一緒にダンスやクイズを楽しむなど、自分たちが企画したことを最後までやり遂げることができた。実際の交流会の中では、時間通どおりに進まなかったり、説明したことが伝わらなかったりした場面もあったが、生徒同士で助け合いながら協力して進める姿が多く見られた。

今回の授業では、生徒のやりたいこと、考えたことが実現できるように、教師はできるだけ見守り、必要最小限のアドバイスに徹した。このように「生涯学習力」を高めるための教師の支援については、模索しながら取り組んでいるが、基本的には生徒主体で進めるように心掛けた。生徒の多くが、困ったときにどうしたらよいか一緒に考え、様々な解決方法があることを知ったり、実際にヒト・モノ・コトを使って調べたりすることが大切であることを習得できたものとする。一人では1歩を踏み出せない生徒でも、「人と関わる」中で「仲間と一緒にやってみよう」と様々な方法で「試す」、挑戦する気持ちや態度が育ち、生涯にわたって学び続けていく生徒につながっていくものとする。



【写真 中1とのピザ7交流会の様子】

(2) 中3ファイブ ～ばいきん0計画～ (I期 石けん作り:9月 II期 ばいきん0計画:11月)

この単元は、修学旅行(6月)での体験活動を振り返った際に、「学校でも、石けんを作ってみよう」という生徒の声をを受けて始まったものである。生徒が興味をもったことや本学級の生徒が夢中で取り組める制作活動であること、生活に身近なものであることなどを踏まえて、学習を進めた。石けん作りのII期では、I期で試行錯誤を重ねて開発した石けんを、今度は「友達に紹介したい」「手をしっかり洗ってもらって、ばいきんをやっつけてほしい」という生徒の思いを受けて学習を展開することにした。II期の授業づくりの工夫と生徒の変容は以下のとおりである。



【人と関わる】

生徒が自信をもって相手に石けん作りのポイントを伝えられるように、作り方を教える工程（電子レンジ、色付け、香り付け、型）ごとに役割を設定した。石けん作りのリーダーの他に、一人一工程を教える役割を設定したことで、正しい情報を相手に伝えながら、自信をもってやりとりができるようになった。

インタビューの際に緊張してうまく聞き出すことができないことがあったが、インタビューの回数を積み重ねたり、上手にインタビューをするポイントを示したりすることで、役割分担しながら進めることができた。



友達に石けんの作り方を

教える前時の練習

【情報を集める】

自分たちで作った石けんについての感想を聞くことができるように、中学部の友達にインタビューする機会を設定した。

人気の色、香り、形を調べた上で、石けん作りをし、実際に石けんの泡立ちを体験してもらい、相手が喜んでいる様子を知ることによって、自分たちが調べたことに自信をもつことにつながった。

【試す】

インタビューの仕方や石けん作りの際の説明の改善をしていくことができるように、相手を変えながら同じ流れで活動を繰り返した。石けん作りを教える活動に繰り返し取り組み、うまくできたことと次時で気を付けたいことの振り返りを積み重ねた。振り返ったことを意識して、自分から石けん作りに必要な物の準備に取り掛かったり、作り方を伝えるときに、相手の名前を呼んだりしてやりとりする姿が増えた。

【自分を知る】

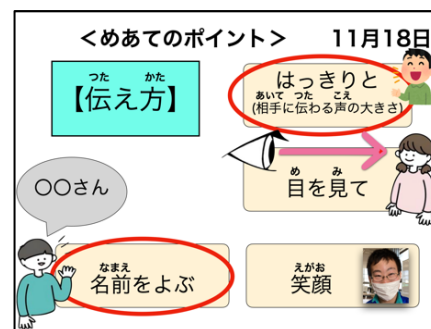
生徒が自分の活動を振り返られるように、評価の基準を生徒全員が理解できるようにイラスト等を用いて具体的に示した。毎時間、本時の目標を「めあてのポイント」として提示した。また、生徒のやりとりを踏まえて「声の大きさ、相手の目を見る、笑顔、名前を呼ぶの中から1～2つを選んで目標にすることで、全員が同じ目標に向かって活動に向かうことができた。

(図2)

目標に対する評価の基準を簡単な言葉やイラストで示したことで、自分の活動を具体的に振り返ることができた。また、自己評価に加えて他者評価を取り入れたことで、自分のうまくできたことや次に頑張りたいことに向き合える生徒が増えた。

(図3)

インタビューや石けん作りを通して、生徒は多くの「ヒト」と関わり、生活に身近な「モノ」に触れ、新しい「コト」に取り組むことができた。また、学級の中では、課題を解決しようと生徒同士で相談したり、考えて行動したりする姿や、新しいことにも挑戦する姿などが増えてきている。本単元の学習を通じて獲得した学びや自分の成長に、生徒自身が気付けたことを、今後の学習や日常生活場面に結び付けることができるように、生徒への働き掛けや日々のやりとり等を大切にしていきたい。



【図2 本時の目標の提示】

めあてのポイント		11月18日	
【伝え方】	あいて つた こえ おお 相手に伝わる声の大きさで、名前をよぶ。	なまえ	先生
◎	きこえるこえで、名前をよべた。	じぶん	◎
○	名前をよべたが、こえが小さかった。		○
△	名前をよべなかった。		△

【図3 振り返り用ワークシート】

4 まとめ

(1) 「生涯学習力」を高める授業づくり

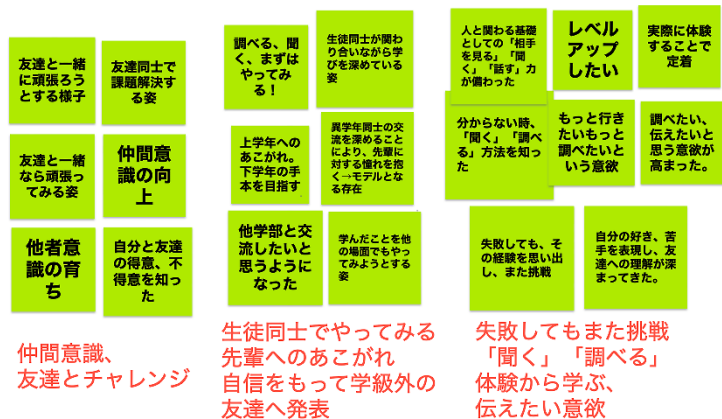
授業づくりの工夫では、学習活動を生徒に任せることで、試行錯誤をする、うまくいかない経験をするなど解決方法を調べたり、話し合ったりして生徒が主体となって考えることができた。また、写真や動画で客観的に振り返る時間を授業のまとめで取り入れるようにした。その結果、自分のことを振り返るだけでなく、友達の様子についても関心をもち、「ここがよかった」「次はもっと〇〇したい」などと評価するようになり、より具体的な目標や姿を思い描くことにつながった。

「わかはとモデル」は他学部とのつながりを意識して作成したものであり、他学部の大事にしたい視点などを参考にし、中学部だったらどこまで求めるか考えて授業づくりを進めることができた。

(2) 児童生徒の変容

授業づくりの中で、生徒に任せる場面が増えたことで、生徒同士がタブレット端末を使って調べる、情報を集めるなど仲間と一緒に課題を解決する経験を積むことができた。それらの経験から「一人では難しいけど、みんなとやったらできた」「楽しい」など、仲間とチャレンジする姿が多く見られるようになった。また、クラスの生活単元学習で学んだことを他学年や他学部の児童生徒に伝える、発表する機会を設定した。相手に伝わるようにはどうしたらいいか考える、困った場面があると他の生徒が助けるなど、生徒同士の自然な関わりが増えた。

児童・生徒の変容



中学部児童生徒の変容についてまとめの話合いから

(3) 教師の関わり方の変容

教師主導で授業を進めるのではなく、生徒同士で考えることができるように、見守る支援、生徒の発信を待つ、できるだけ必要最小限のアドバイスをする、失敗してもよいというスタンスで支援をするように変わった。また、「〇〇するためにどうする?」と問い掛けることで、生徒自身が考える時間が生まれ、生徒の発想やアイデアを生かして授業を進めるように変わった。

(4) 今後に向けて

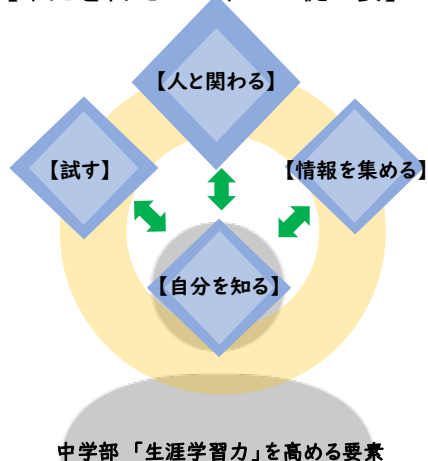
授業づくりの大切な要素として「わかはとモデル」を活用し、学部全体で「生涯学習力」が高まった生徒の姿を共有したり、よりよい授業のためにはどうしたらよいか意見を出し合ったりすることで教師の支援方法や生徒同士の関わり方を考えるようになった。また、中学部の教育目標である「仲間とチャレンジ」する経験を積み重ねることで様々な場面に変容が見られた。中学部の生活単元学習は、目標を達成できたときの達成感や満足感を味わったり困ったときの解決方法を導き出したりする中で、試行錯誤をする、情報を集める、人と関わって活動する、自分の得意なことや相手の得意なことを知るなど、「わかはとモデル」の要素を取り入れた学習活動を展開することができた。

一方で「わかはとモデル」はまだ改善の余地が残されていると感じる。「私の応援計画」から導き出される生徒の願いや思いを大切にしながら授業計画を考えているが、そこに「わかはとモデル」の4つの要素なども組み込んで「私の応援計画」を作成することができれば、教育活動全体を通して「生涯学習力」を高めるためにどうするかという視点で授業づくりをしたり、家庭、地域とともに「生涯学習力」を高めていくことにつながったりできると考える。

中3生徒の大まかな思い・願い（応援計画と自立活動の視点から）


- 自分の考えや気持ちを相手に伝える。
- 相手の考えを受け入れたり、認めたりする。
- 新しいことに挑戦し、経験の幅を広げる。
- 自分で考えて行動したり、状況を見て他者に働き掛けたりする。

【単元を終えての中3生徒の姿】



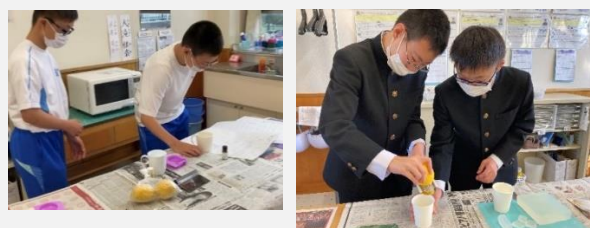
「生涯学習力」を高める要素	・授業内で見られた生徒の姿 →有効だった手立てや支援方法 ▲改善点
<p><人と関わる> 人とつながりをつくらう</p>	<p>・相手（中学部1、2年生）に伝わるように石けん作りを教える姿 →一人一工程を教える役割分担や、繰り返し取り組む時間の設定 →「〇秒」「〇杯」「〇滴」など、作り方を数字で提示 ▲導入と振り返りの時間だけではなく、活動中も「相手に聞こえる声の大きさ」「笑顔」「相手の目を見る」などを意識して取り組むための手立て</p> <p>・生徒同士で相談して準備を整えたり、石けん作りの活動を進めたりする姿 →動線の整理や石けん作りの工程を視覚的に提示 →リーダー役の設定、生徒自身が思考して活動に向かえるように見守る支援</p>
<p><情報を集める> 見て聞いて調べよう</p>	<p>・自分たちで開発した石けんのことを詳しく説明したり、友達と協力して中学部1、2年生に石けんの感想を聞いたりする姿 →自信をもって石けんの作り方や材料を伝えるために、繰り返し石けん作りを行う時間の確保 →インタビュー形式で感想を聞く場面の設定、インタビューの際の役割分担 →インタビュー内容の項目立て、中学部の友達に人気の石けんランキングの集計</p>
<p><試す> 試してみよう</p>	<p>・石けん作りを教える中で、うまくできたことや次時で頑張りたいことを考える姿 →動画を見ながらポイントを絞って振り返る機会を繰り返し設定</p>
<p><自分を知る> いろいろな自分を知らう</p>	<p>・前時の振り返りを基に、本時の目標を決める姿 →人と関わる際に大切にしたいことを「めあてのポイント」として提示し、生徒とのやりとりを踏まえて目標を決める場面の設定 →イラストや簡単な言葉を用いた評価基準の提示</p> <p>・一時間の活動を振り返り、目標に対しての自己評価をする姿 →活動の様子を動画で振り返る場面の設定 →自己評価と他者評価（教師）の比較 ▲他者評価として生徒同士で活動の様子を振り返る場面の設定</p>

※太枠：単元を通して特に高めようとした要素

○背景 児童の実態 ★目指す姿	
<ul style="list-style-type: none"> ・発表に自信がもてなかったり、関わる相手が限定的だったりする。 ・身近な人との関わりを好むが、相手との距離のとり方や言葉遣いなど、適切な関わり方は練習中である。 ・自分で決めたことや予定などが変更になると、不安になることがある。 ★自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いて認めたりする姿 ★新しいことに挑戦して、好きなことや得意なことを増やし、自信をもって取り組む姿 ★集団の中での自分の役割が分かり、友達と協力して活動する姿 	
<p>【学校】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経験したことを基にした物作りへの関心が高い。 ・特定の友達との関わりが多い。 ・係活動の内容や自分の役割が分かると、進んで取り組む。 ・自分の考えをもっていても、伝えることに消極的である。 <p>【家庭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭における役割が、少なかった。 ・好きな制作(折り紙)をして気持ちを満たし、自分のしたいことが第一優先だった。 	
教師の見取り	
<ul style="list-style-type: none"> ・好きなことや見通しをもてることには、自分から進んで取り組めるのではないか。 ・学級集団またはペアやグループの友達と、同じ目標に向かって活動し、達成感を共有することで、様々な友達と一緒に活動する楽しさを味わい、関わりの幅が広がるのではないか。 ・新しいことに挑戦する機会を設定することで、自分の役割に自信をもって取り組むことができるのではないか。 	
その後の授業でのアプローチ	
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な役割を経験できる繰り返しの活動の設定 ・ペアやグループになって、誰とでも一緒に活動する機会の設定 ・活動がうまく進まない経験をし、友達同士で課題を解決する場面の設定 	

人…人と関わる 情…情報を集める 試…試す 自…自分を知る

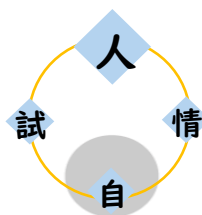
【授業中の生徒の姿】



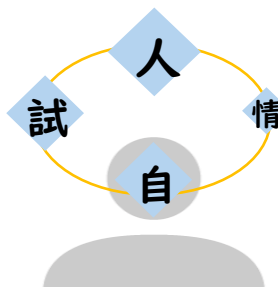
- ・学級で石けん作りを開始。不安なときは、仲良しのEに頼りながら、活動を進める。
- ・オリジナルの石けん作りでは、レモンの石けんを希望。同じく希望したBとペアになり、石けん作りやインタビューを繰り返す。
- ・作り方に見通しをもてたことで、Bと協力して作るようになる。(例:不安定なカップに手を添えるなど)
- ・授業時間以外でも、Bと関わる場面が増える。(例:日直のBに、帰りの会の開始時間を教えるなど)

【Aの「わかはとモデル」の変容】

<単元前>



<単元の中で膨らんできた要素>



- ・一人では不安。クラスではEが頼りな存在。
- ・他者と関わりたい気持ちはあるが、自分から働き掛けることが難しい。

- ・活動への安心感を抱きながら、調べる、試す、関わる学習経験を積み重ねる。

高等部 授業づくりの実際

1 はじめに

高等部における研究対象授業『Dスタディ』は、discovery（発見）とdo（やってみる）の頭文字の「d」から命名されており、生徒の実態や教育的ニーズを基に知的好奇心を喚起しながら、問題発見・問題解決型の授業を展開することで、生徒の生涯学習力を高めることを目的としている。

このDスタディは、令和元年度から本校で取り組んできている「生涯学習力」をテーマとした研究を通して、学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続し、子どもたちが生涯にわたって学び続けられるようにするための学習として令和2年度に設定された。

本校の特徴的な取組である「私の応援計画」は、その作成を通して子どもたち自身が学びの主体であることを自覚できるよう、生徒が自分の意思を表現できる環境を構築し、生徒たちの「思い」「願い」を大切にしている個別の教育支援計画である。Dスタディでは、この「私の応援計画」を基に、生徒の教育的ニーズや知的好奇心に即した各教科の内容を組み合わせながら単元を設定し、学習内容を決めている。そして生徒が自ら問題を発見し、問題解決に向けて情報を収集したり、整理・分析したりしながら実際に行動していくといった学びを発展的に繰り返しられるよう、教師は学びの伴走者となって支援している。

Dスタディにおけるこれまでの授業実践を振り返ると、問題解決的な活動が発展的に繰り返される一連の学習活動である「探究的な学習」学習サイクル（図1）と類似したサイクルが展開されていると考えられた。同様に、令和2年度、令和3年度の全校授業研究会における提示授業についても、この探究的な学習のサイクルが発展的に繰り返されていくような単元構成となっている

（図2、図3）。このようにDスタディにおける学習活動は、その特徴が「探究的な学習」と類似してはいるが、生徒の自立的な生活を目指した調和的な発達の課題に応じて、体験的な学習活動を通して各教科等の内容を習得していくといったねらいから、探究型の学習サイクルを導入した生活単元学習として位置付けている。

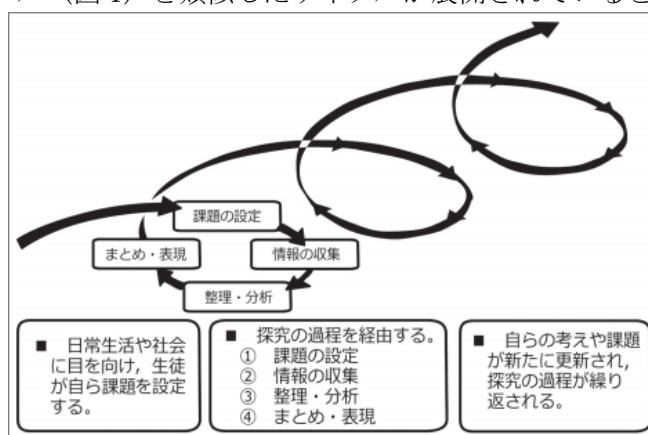


図1 探究的な学習における生徒の学習の姿
（文部科学省，2009）

2 「生涯学習力を高めるための要素」の検討

今年度は、生涯学習力を高めるための要素について、小学部・中学部・高等部のつながりを意識し、単元計画に反映しながら授業づくりを進めていくことを目的とした。そのため、学部研究のスタートとなった4月14日の学部研究会では、各学部で「生涯学習力を高めるために大切にしていること」の要素を検討するための意見交換を実施した。この意見交換では、教員それぞれが考える「生涯学習力を高めるために大切にしていること」について、その考えが導き出された理由を踏まえて話し合うとともに、「生涯学習力が高まった子どもの姿の具体」を示した。この意見交換での語りを逐語記録に書き起こし、44の下位データを生成した。この下位データは次の学部研究会においてカテゴリー化を行い、さらに他学部のデータと照らし合わせながら研究部で整理し、最終的に「人とのつながりを広げる」「挑戦し続ける」「経験を生かす」「なりたいたい自分を知る」の4つの要素を導き出すことができた（わかはとモデル）。そして、この4つの要素に沿って生涯学習力を高めるための具体的な生徒の姿を意識した授業実践に取り組んだ。



学部研究会の様子

2020 全校授業研究会 提示授業「みんなでGO！～飲食店でテイクアウト編～」

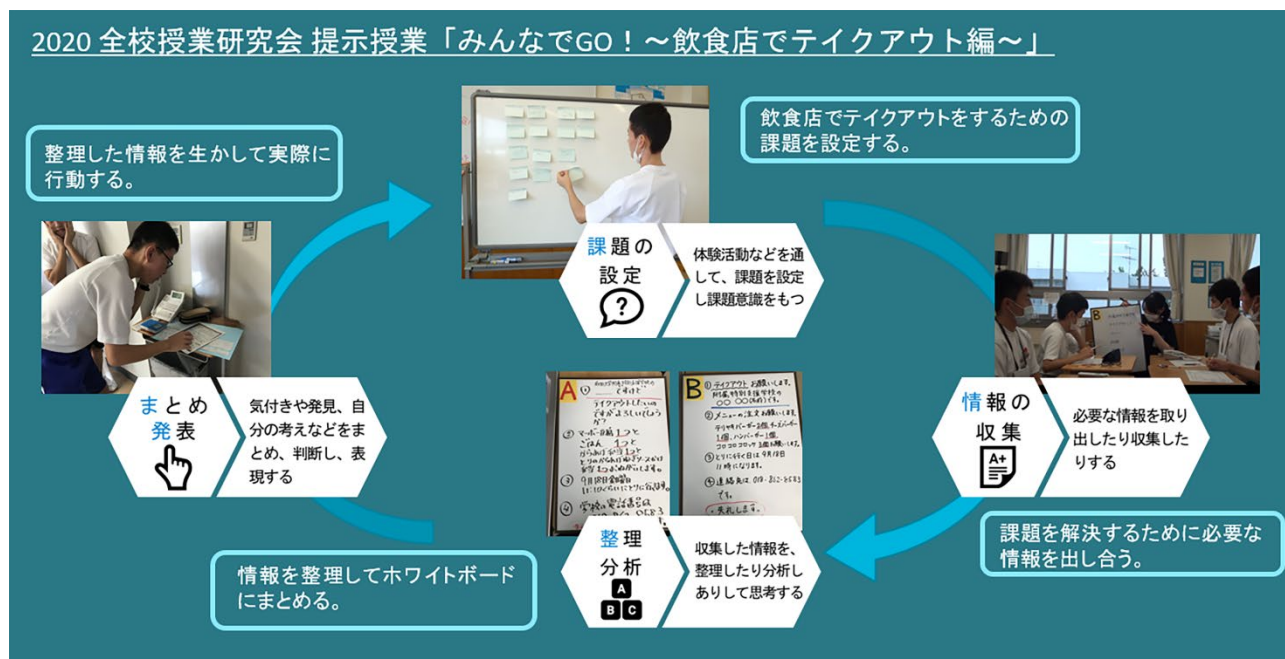


図2 令和2年度全校授業研究会提示授業「みんなでGO！～飲食店でテイクアウト編～」

2021 全校授業研究会 提示授業「通町商店街のCMを制作しよう」

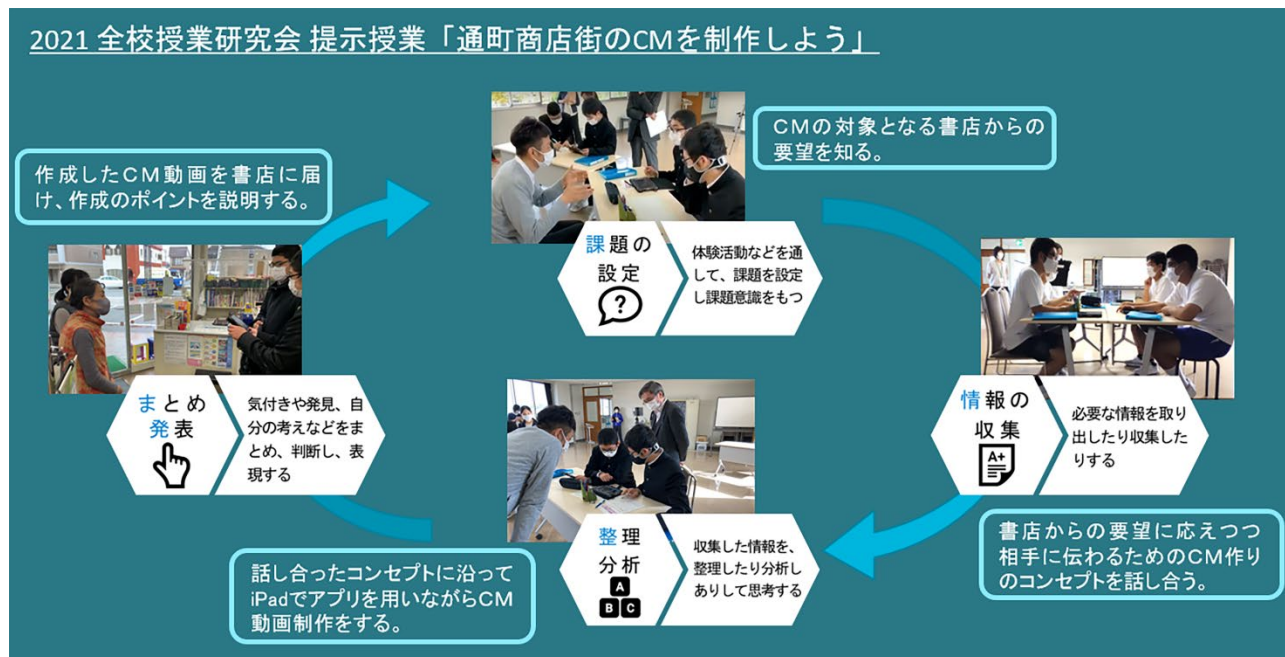


図3 令和3年度全校授業研究会提示授業「通町商店街のCMを制作しよう」

3 単元構想シートの活用

子ども一人一人の「私の応援計画」を基に、生徒の教育的ニーズや知的好奇心に即した各教科の内容を組み合わせながら単元を設定し、学習内容を決定していく上で、1つの単元を通してどのような要素を高めていけるかを整理できる単元構想シート（資料1）を作成した。

この単元構想シートは、学部縦割りで意見交換を行うつながりミーティングにおいて活用した。つながりミーティングでは、子どもの「思い」「願い」の共通理解を図りながら、学習内容や学習活動、教師の手立てについて多くのアイデアが出された。特に生徒の小・中学部時代を知る教員らが、過去のエピソードから想定される生徒の思考や行動について話した内容は、授業者には大変参考になった。また、どのような要素を高めていくかという視点をもつことによって、学習活動の具体的な内容についても様々なアイデアが出された。これらのアイデアを手掛かりとしながら、授業者は自分の考えを明確にし、授業のイメージを膨らませていくことができた。

4 生徒の変容の見取り

生涯学習力の高まりを、単元の最初の姿からどのように変容していったかを見取ることができるよう、学校・家庭における生徒の姿、授業でのアプローチと授業での生徒の姿、そしてわかはとモデルについての変容を図で示した（資料2）。

「生涯学習」という観点から、単元を通じた変容だけではなく、さらにこの授業で身に付けた力が社会の中でどのように役立っていくのか、その後の生徒の姿も追っていく必要があることを確認した。また、学びを積み重ねていく過程で、1つの単元を通して育んできた要素が様々な場面でどのように生徒の行動として表れていっているのかを見取っていくことも大切であることを確認した。

5 授業の実際

（1）雪グループ「雪グループの挑戦 其の二 ～行ってみよう！～」(全校授業研究会：7月)

全校授業研究会では、雪グループの「雪グループの挑戦 其の二 ～行ってみよう！～」の授業を提示した。この授業は、「電車に乗って〇〇へ行きたい」「〇〇で△△を食べたい」という生徒の思い・願いを出発点に、切符はどうやって購入するのかといった問題解決に向け、電車の切符の購入方法を調べたり、券売機と同じタッチパネル教材を使って切符購入の練習を行ったりした。

電車の切符の購入方法を調べる場面では、最初に個別にタブレット端末を使ってインターネットで検索できるようにした。検索するスキルが生徒によって異なり、なかなか一人では検索することが難しい生徒もいる。そのような場合には友達に聞いたり助けを求めたりしながら、人と関わっていくことで情報を集めていくことができるよう、授業者が「〇〇さん、調べるの早いね」「〇〇さん、どのように検索したのだろうね」等と言葉を掛けた。自分で検索することが難しかった生徒も、その言葉掛けをきっかけに友達に聞いて調べようとする姿が見られた。タッチパネル教材を使って切符の購入の仕方を練習する場面では、教材に興味をもって積極的に練習に取り組もうとする生徒や、繰り返し練習ができたことで「一人でもできる」ことに自信をもった生徒の様子が見られた。

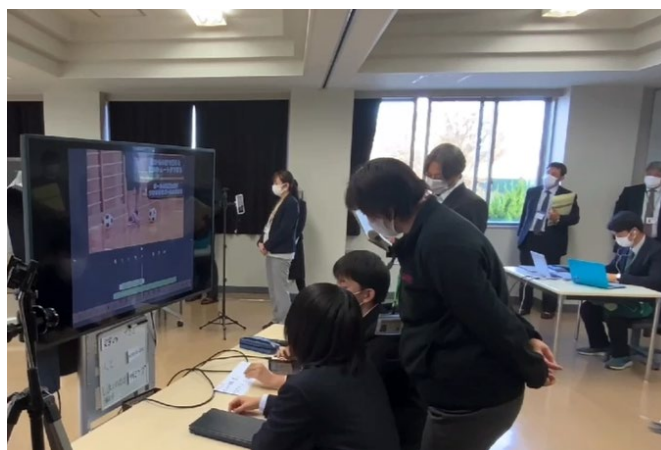
授業研究会を通して、わかはとモデルによって生徒に身に付けさせたい力を明確にした授業づくりができていたことが確認できた。また、実際に校外学習に行った後に、その経験をどのように生かして学習を発展させていくかによって、さらに生涯学習力が高まっていくことが期待された。



校外学習で切符を購入する生徒の様子

（2）月グループ「お悩み解決！ ～運動部からのSOS～」(公開授研究協議会公開授業：11月)

公開授業研究会では、月グループの「お悩み解決！ ～運動部からのSOS～」の授業を提示した。この授業は、「もっとサッカーやバスケットが上手になりたい」というサッカー部・バスケットボール部の生徒の思い・願いを出発点に、プロの指導者から学んだことを他の部員に伝えるため、タブレット端末の動画編集アプリを使って動画の制作を行った。動画の制作では、どうしたら伝わるか、どうやったら伝わりやすくなるかといった問題解決に向けて、生徒同士が話し合いながら字幕編集を行った。



公開研究協議会での授業の様子

字幕編集では、生徒が二人一組のペアになって作業を進めた。前時までの学習の中で生徒たちが考えた「伝わりやすさ」のポイントを、導入時に授業者が生徒と一緒に確認したことで、字幕編集の作業を進める際はそのポイントに気を付けているかどうかについて生徒同士で話し合っていた。

この授業を積み重ねていくうえで、授業者は生徒が自分の考えや思いを伝えることに安心感をもてる環境づくりを心掛けた。具体的には、生徒のうまく言葉にできない表現を汲み取って代弁したり、生徒の発言を肯定的に受け止め、一人一人の考えや思いを生徒全員が共有できる場を設けたりした。このような取組による生徒が安心して発言できる環境を基盤に、授業では生徒同士が活発に話し合う姿や、友達の意見を尊重する姿が見られた。

授業研究会では、「生徒が伝える手段や方法を身に付けるための支援」をテーマに協議を進めた。他者とのやり取りの中で折り合いを付けながら、自己決定を繰り返していく生徒の様子や、他者の考えを受け止めながら建設的な意見を出す生徒の様子から、生徒の実態や生徒の成長に合わせた段階的な指導が行われていることが評価された。

6 まとめ

生涯学習力を高める授業づくりを通して見られた生徒の変容、教師の関わり方の変容について、高等部から以下のような意見が出された。

<生徒の変容>

- ・意思表示をする場面が増えた。やってみようという気持ちも見られた。(2)
- ・生徒が自分の好きなことややりたいことを積極的に発信するようになった。(2)
- ・自己解決できないものに対する援助要請スキルがたかくなった。(2)
- ・自分で解決しようとするが増えた。(2)
- ・解決方法は1つではないということを知った。(2)
- ・失敗したときや思い通りにならなかったときにもう一度やってみようとする姿が増えた。(2)
- ・授業でやったことを家でもやってみる姿が見られるようになってきた。
- ・あまり話さなかった生徒が休み時間などで話す場面が増えた。
- ・日頃から生徒たちで話し合う姿が増えた。

<教師の関わり方の変容>

- ・卒業後、豊かに生活するために必要な力について考え、その要素を取り入れた授業を考えた。
- ・「生徒が失敗しないように」から「生徒が失敗から何を学ぶか、どのように生かすか」と考えるようになった。(2)
- ・卒業までに身に付ける力ではなく、その後の学びがどうなっていくかという視点で考えられるようになった。(2)
- ・「卒業後も学び続ける」ために必要な力を明確にしたことで普段の関わり方が変わった。
- ・生徒が自分の思いや願いを発信しやすいように安心して活動できる環境を整えることを大切にした。

生涯学習力を高める授業づくりを通して、高等部では、生徒が自ら発信していく力や問題解決を図る力が身に付いてきたことを実感したことが確認できる。この生徒の変容は、生涯にわたって学び続ける生徒の「未来」を見通しながらも、生徒が安心して様々なことに挑戦できるよう、「現在」の子どもの姿を大切にされた教師の関わり方の変容による成果だと考える。また、生涯学習力を高める授業づくりの過程で、Dスタディの単元構想の基となる「私の応援計画」にある生徒の思い・願いと「わかとはモデル」で示される生涯学習力を高めるための要素が相互に作用されたことで、学部全体で「現在」を「未来」につなぐイメージを共有できた。今後は、高等部を卒業した生徒の姿から、生涯学習力を高める授業づくりを通して育まれた力が、社会の中でどのような形で発揮されているのかを見取れるよう、生徒の学び続ける姿を追っていくことが必要ではないかと考える。

単元構想シート

○子どもの思い・願い(私の応援計画と自立活動の視点から)

A

・友達の意見を聞き入れ、それに対する自分の思いや考えを伝える。

B

・自分の思いや考えを友達に伝えたり、友達の意見を聞いて物事を判断したりする。

C

・自分のやりたいことを言葉や行動で表現する。

D

・知識や経験を生かし、自分の考えをもって伝えたり、自分から行動したりする。

E

・自分の思いを友達に伝えたり、友達の意見を参考にしよりよい方法を見付けたりする。

○学習グループ全体で育みたい姿と関連する要素

<高等部の4要素> ① = なりたい自分を知る ② = 経験を生かす ③ = 挑戦し続ける ④ = 人との関わりを広げる

- ・自分の思いを実現するためにどうしたらよいかを考え、これまでの知識や経験を生かしながら行動する。②
- ・自分の思いをもち、それを友達に伝えたり、相談したりする。①④
- ・「さらにこうしたい」「もっとやりたい」という探究心をもつ。③

単元名:雪グループの挑戦 其の二 ～行ってみよう!～

○単元目標

- 1.【知識・技能】公共交通機関の使い方や目的地までの行き方が分かる。
- 2.【思・判・表】必要な情報を集め、友達との話し合いを通して計画を立てる。
- 3.【学び・主体】「さらにこうしたい」「もっとやりたい」という探究心をもって活動する。

○指導について

<高等部の4要素> ① = なりたい自分を知る ② = 経験を生かす ③ = 挑戦し続ける ④ = 人との関わりを広げる


- ・改善点に気付けるように、体験活動の様子を撮影し、その様子を見ながら話し合いをしたり、フィードバックしたりする時間を設ける。②
- ・友達と何をやるか、どのようにやるかを相談する場を設け、話し合いの内容や調べた事柄を整理できるように、ホワイトボードを活用したり、イメージしやすい具体物やイラストを用いて共有したりする。①④
- ・失敗を恐れずにやろうとしていることを行動化できるように、失敗から改善点を見付けたり、改善点に気付けたりしたことを価値付ける。①③

○単元計画

学習活動	関連する要素
友達と意見を出し合い、行きたい場所を決める。	①④
目的地までの行き方、必要なものなどを調べ、計画を立てる。	②④
目的地まで行ってみる。	②③
振り返りから、改善点を見付けて新たな計画を立てる。	①②③④
計画を基に、目的地まで行ってみる。	②③
これまでの活動を振り返り、改善点や工夫してよかったこと、今後やりたいことを発表する。	①②③④

令和4年度 エピソード
 <単元最初の姿>

高等部 1年

背景 ○生徒の実態 ★目指す姿	
○真面目で一生懸命な姿で、様々な活動に積極的に取り組む。 ○サッカーの強化チームに所属しており、部活動や家でのトレーニングを意欲的に行っている。 ○自分の苦手を理解しており、弱みを見られそうな場面では誤魔化したり、その場から立ち去ったりする。 ○話し合いの場面では、自分の意見を伝えるのをためらったり、友達の意見に合わせようとしたりする。 ★【学校】自分の思いや悩みを正直に伝えることができる。 ★【家庭】無欲な面があるので、自分のしたいこと、欲しいものなどを伝えることができる。	
学校・家庭での生徒の姿	
・授業や行事に積極的に取り組む。8月の竿燈祭りに差し手(演技)として参加をした。竿燈を上手く上げられないことも多かったが、諦めずに練習に取り組んだ。 ・発言する場面では、挙手を控えるような素振りや、周りの友達を伺いながら挙手をしていた。 ・宿題を忘れてたり、やってこなかったりした際、言い訳をして誤魔化すようなことがあった。	
教師の見取り	
・自分に自信がなかったり、意思を伝える経験が少なかったりしたことからか、発言に消極的な場面が見られる。 ・友達の意見に同調することも少なくない。 ・上手い、下手が分かるような活動においては、苦手だな、嫌だな、と言いながら活動をするが、諦めずに活動することができる。また、友達を称賛したり認めたりすることができる。	
その後の授業でのアプローチ	
・生徒6人で話し合い、そこで決まったことが授業で反映されるような話し合いの場面を多く設け、発言したことが授業で活かされる授業を展開した。 ・話し合いの中では、意見を合わせる視点を持ち、互いの意見が認められる雰囲気の中で活動を進めている。 ・意見を表出する機会を増やすため、ペアで活動する場面も多く設定した。 ・自分のしなければならないことを自発的に行動できるようにしたいと思い、ビデオレターやまとめの動画を制作する際、監督・撮影・台本提示のように、一人一人に役割を付けた活動を繰り返し実施した。	

人…人と関わる 情…情報を集める 試…試す 自…自分を知る

【授業中の生徒の姿】



「個人的には…こう思うんですけど…」と、他者とは違う意見を述べる。伝え方から他者の考えを尊重しようとする姿が見られる。また、自分なりの考えとその理由を他者に理解してもらえるように伝えようとしていた。

